

刊行辞

対馬宗家文書は国史編纂委員会をはじめとして日本の対馬歴史民俗資料館・国立国会図書館・東京大学史料編纂所・慶応大学附属図書館などに所蔵されている文書とともに、朝鮮後期対日関係史研究の基礎となる資料である。

これらの機関に所蔵されている文書に対する調査・整理の実態を見れば、本来の所蔵機関である対馬宗家文庫（対馬藩万松院所蔵文庫として現在は長崎県の対馬歴史民俗資料館に保存）の文書は1975年から1990年まで記録類をはじめとした日記類《宗家文庫史料目録》5冊（日記類、記録類Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、記録類Ⅳ、和書・漢籍）が刊行されたところである。そして東京大学史料編纂所が1994年に《宗家史料目録》として刊行した程度である。

本委員会が所蔵している対馬宗家文書は朝鮮総督府傘下の朝鮮史編修会が《朝鮮史》編纂事業とともに植民統治の資料とするために、1926年と1938年に2回にわたって購入したものがあるが、朝鮮史編修会はこれらの文書を内容別に分析・整理することができなかった。その理由は、対馬宗家文書の成立背景・作成・体裁・種類など、文書の全体像に対する体系的な理解なしでは分析・整理が難しく、また古語・方言などの難解な文体の解読に携わる人材も不足していたためである。

未整理の対馬宗家文書は1945年の光復以後本委員会で保存・管理されることになった。本委員会は1960年代末までは保存・管理にだけ力点を置いてきたが、1970年代初から本格的な整理を開始し、現在は記録類(6,592点)・古文書(11,242点)・書契(9,442点)・絵図類(1,485点)・印章(22個)などに大別して、全28,783点が確認された。

1988年本委員会の果川庁舎移転を契機に、上記史料の幅広い利用のために、本委員会は宗家文書目録集の刊行計画を樹立し推進してきた。この計画に従って、1990年10月には《対馬島宗家文書記録類目録集》1巻を刊行し、1991年から1994年にかけてはその後続事業として《書契目録集》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ集を全5冊で完刊した。そして今年と来年にかけて古文書の日録集を刊行するに至った。

今回刊行する《対馬島宗家文書古文書目録集》は一枚一枚からなる文書 11,242 点を対象にしている。既存の対馬島宗家文書として把握していた 11,200 点に、韓国古文書として間違えて分類していた 42 点を追加したものである。対馬島宗家文書の古文書は、対馬藩が江戸時代に朝鮮との通交並びに貿易を独占していたためにこれと関連する文書を網羅している。釜山倭館を通じて成立っていた朝日交渉過程で生産された各種の外交文書と覚書、書簡、貿易関係証書、そして膨大な量の藩政文書を収めている。

これらの文書のなかには文書の前後が破損していて誰が誰に送ったのか、あるいはいつ作成されたものなのかを知ることができず、古文書として活用しがたいものも相当数含まれている。それだけでなく《記録類》に記載された内容と重複する文書もある。しかし本委員会所蔵の古文書の最大の特徴は《記録類》や《書契目録集》では見ることのできない文書がかなり多く入っているという点である。例を挙げれば、使者をはじめとして朝鮮に渡るさまざまな階層の対馬島人に発給された文書が網羅されているので、朝鮮との交渉が対馬島人の生活と直結していたことはもちろん、藩政の延長としての朝日交渉を推し量ることができる。これと同じく朝鮮との交渉過程で対馬島人が江戸藩邸や幕府に取り次ぐ文書、そして藩財政と関連して幕府に対し財政援助を要請した文書も多数含まれている。《記録類》や《書契目録集》が朝日通交並びに貿易に関して大きな輪郭を提示しているとすれば、古文書類はここから漏落した日常的側面並びに藩政が反映されている。すなわち《対馬島宗家文書古文書目録集》は《記録類》や《書契目録集》の内容を補完する側面があるため既に刊行された目録集と併行して利用すれば、朝日交渉の実態を一層具体的かつ立体的に理解するのに助けとなるはずである。

今回刊行する《対馬島宗家文書古文書目録集》はあまりにもその量が膨大な上、対馬藩の対朝鮮外交並びに貿易関係文書と藩政文書とを分けることが難しい部分も多かった。古文書目録集は交渉対象及び場所を中心に朝鮮（倭館）・対馬藩・幕府に分けてⅠ・Ⅱ集を刊行する予定である。《対馬島宗家文書古文書目録集》Ⅰは朝鮮（倭館）を中心に成り立った通交（通信使・訳官及びその他の外交使行・漂民の送還）

と貿易を中心に編集した。《対馬島宗家文書古文書目録集》Ⅱは対馬藩政自体と幕府との交渉を中心に刊行する予定である。《対馬島宗家文書目録集》の刊行を契機に対馬島宗家文書の全貌を明らかにすることはもちろん、前近代対日関係史研究に新たな成果が出てくることを期待してやまない。

今回の目録集刊行において8旬老体にもかかわらず、この間の原稿整理を引き受けていただいた林鐘海先生と李薫・鄭成一研究委員に謝意を表すところである。

1995年12月5日

国史編纂委員会
委員長 李元淳